

第3回日本語指導研究推進校連絡会・第4回日本語指導研修会

検証実施機関（団体）：兵庫県教育委員会事務局
兵庫県教育委員会事務局 人権教育課 今川 美幸

1 検証対象の研修・授業について（該当するものにチェックを入れてください。）

養成／研修	<input type="checkbox"/> 養成	<input checked="" type="checkbox"/> 研修
タイプ	<input type="checkbox"/> 基礎教育	<input checked="" type="checkbox"/> 専門教育 <input type="checkbox"/> 支援員教育
研修・授業日（期間）	2018年 11月2日（金）	
総時間数	3時間	
研修・授業科目名	第3回日本語指導研究推進校連絡会・第4回日本語指導研修会 「外国人児童生徒等に対する日本語指導－各教科の授業に参加できる力の育成に向けて－」	
受講者	人数：24名（アンケート提出者：19名） 年齢層：30歳代～50歳代 外国人児童生徒等教育の経験：13名 日本語指導（成人対象を含む）の経験：今年度担当者 11名	

2 地域及び学校現場の外国人児童生徒等の受け入れの状況

（1）当該自治体における外国人児童生徒等の数・分布とその民族背景

現在、兵庫県において公立学校に在籍する外国人児童生徒数は3,152人（平成30年5月1日現在）で、そのうち日本語指導が必要な外国人児童生徒は1,002人である。なお、日本語指導が必要な日本国籍の児童生徒は305名で、平成27年度と比較すると1.6倍に増加している。県内の分布をみると、神戸市と姫路市は集住化傾向にあるが、その他の地域は散在化傾向である。

日本語指導が必要な外国人児童生徒の母語の内訳で、最も多いのは中国語の298名（29.7%）、次にベトナム語が294名（29.3%）、フィリピン語が107名（10.7%）である。

近年、アラビア語が増加傾向にあり、英語、ネパール語、ウルドゥ語も微増している。

（2）当該自治体における外国人児童生徒等の受け入れ・指導体制

兵庫県教育委員会では、平成12年に「外国人児童生徒にかかわる教育指針」を策定し、外国人児童生徒の自己実現を支援するとともに、すべての児童生徒に国籍や民族等の「違い」を「違い」と認め合い、豊かに共生しようとする意欲や態度を育むなど、人権尊重を基盤に多文化共生社会の実現をめざす教育を推進するために以下のような事業を実施している。

① 受け入れ体制

（a）「子ども多文化共生センター」における教育相談

外国人児童生徒等の保護者や市町教育委員会、学校（管理職や担任等）に対する教育相談を実施している。

（b）「外国人児童生徒にかかわる就学支援ガイダンス」

神戸市や姫路市等で年間4回実施し、当課作成の「就学支援ガイドブック」（多言語対応）に基づき説明し、就学支援や受け入れ体制の整備をしている。

② 指導・支援体制

(a) 母語支援

来日間もない外国人児童生徒等に対して、児童生徒の母語が話せる子ども多文化共生サポーターを派遣し、学校への早期適応や心の安定を図る取り組みを行っている。

(b) 日本語指導

県内3校を日本語指導研究推進校に指定。推進教員を配置し、日本語指導について研究を進め、成果を県内に発信している。

(c) 教員等研修

各市町教育委員会や日本語指導研究推進教員、児童生徒支援教員(日本語指導)等に対して研修会を実施し、多様な背景をもつ外国人児童生徒等への理解促進を促したり、日本語指導の指導力向上を図ったりしている。

(3) 外国人児童生徒等教育に関わる教員(一般教員を含む)、支援員の教育力の課題

学校では、外国人児童生徒等教育に携わることになった全ての教員が、必ずしもこれらの役割に必要な専門性を習得するための教育や研修を受けているわけではない。また、外国人児童生徒等教育に携わる教員が短期間で担当を交代するため、指導力等の積み上げが困難な状況である。日本語指導支援員に関しても、退職教員や地域支援者が担当している市町が多く、十分な専門的知識や技能を有しているとは言い難い。

市町によって課題は異なるものの、本県では散在化傾向にあるため、受け入れ体制が整っていない学校に外国人児童生徒等が入学・転入する場合も少なくない。そのため「外国人児童生徒等に対する教育」全般について課題になっている学校もある。日本語指導に関しては、発達段階や母語、滞在期間等、個別性に対応できる基礎的な知識や指導方法、日本語習得状況を見取るスキルや個別の指導計画を立て、それを指導に活かせる実践力等、課題は山積している。その中でも、日本語指導が必要な児童生徒の自己実現を図る上で、各教科の授業に参加し思考できる日本語力を育成するための指導力等は喫緊の課題であると捉えている。

3 研修・授業の成果について

(1) (受講者アンケートより抜粋)

① 受講者の研修への期待 (アンケートのIより)

本研修会に対する受講者の期待を分類すると「JSLカリキュラムの授業づくり」、「指導方法」、「その他」の3点であった。本研修のねらいであるJSLカリキュラムの授業づくりや指導方法への期待とともに、取り出し授業や補充学習、在籍学級でできる日本語指導等、限られた時間の中で日本語の習得や教科内容の定着を図るための効果的な指導について期待を寄せて参加していることがわかる。具体的な内容は以下の通りである。

【JSLカリキュラムの授業づくり】

- ・JSLカリキュラムの授業づくり (9人)
- ・教科での「学習活動を通して」という内容にひかれた
- ・いろいろな教科に応用できる支援の方法

【指導方法】

- ・日本語指導の方法 (3人)
- ・国語科の「聞く・話す・読む・書く」について楽しみながらバランス良く学ばせる方法

【その他】

- ・学級での取り出し授業と入り込み授業のバランス
- ・授業の補充学習について
- ・限られた時間の中での効果的な指導について
- ・在籍学級でできる日本語指導（2）
- ・日本語指導の計画について
- ・高校受験まで何を重点的に学ぶべきか
- ・学校運営していくために必要な情報等

②受講者の研修内容の理解度・満足度（アンケートのⅢ①より）

アンケート結果は「ほぼ一致」と「だいたい一致」を合わせると94%であった。「あまり一致していなかった」1名の意見としては、「学んだことの定着を図るための指導方法や文章が書けない児童への指導を期待していたから。」というものであった。

ア ほぼ一致	9人（47%）
イ だいたい一致	9人（47%）
ウ あまり一致していなかった	1人（5%）
エ 全く違っていた	0人（0%）

③関心を高め、教育力の向上を促したと考えられる内容・活動（受講者アンケートⅢ②の回答より）

【内容について】

JSLカリキュラムの基本的な考え方や日本語の目標の立て方、児童生徒のつまずきについての内容が参考になったようである。なかでも、児童生徒の「つまずき」を想定したうえで学習計画を立てることの意義を感じた受講者が多かった。これまで各教科の指導内容における「つまずき」は想定して指導していたと思われる。しかしながら、日本語指導が必要な児童生徒のつまずきとはどのようなものを具体的に考えたことやそのつまずきを指導計画に反映させる過程でその重要性をさらに感じたのだと思われる。

また、取り出し指導を行うことにより、在籍学級の教科内容を未習にしない手立てとして、学習内容を精選することや在籍学級との連携の大切さを改めて考えたという受講者もいた。さらに予習型の学習は、児童生徒が在籍学級に戻った時、学習に参加できたり、自信がもてたりする支援になることの有効性を実感したという声も聞かれた。

【活動について】

班での演習が有益であったと感じている受講者が多かった。実際に班で授業の計画を立てることで、JSLカリキュラムに基づいた授業づくりが理解できたと思われる。また、班員と話し合うことで、様々な見方や考え方を聞け、それが参考になったという声も多かった。

④受講者が今後に見込む研修・授業の内容と活動（受講者アンケートⅣより抜粋）

○内容について

【指導内容】

- ・単元を通した授業設定（計画）
- ・協同的探究学習
- ・日本語習得が難しい児童への指導内容

【指導方法】

- ・教科ごとの教え方
- ・JSLの授業づくり
- ・日本語習得が難しい児童への教え方
- ・担任が一斉に指導をする場合の具体的な指導方法
- ・表現力の育成

【研修形態】

- ・講義
- ・学校での実践例
- ・先生方との話し合いの時間

【その他】

- ・友達とのコミュニケーションのための会話のポイント
- ・校内の支援体制づくり
- ・時間割の組み方
- ・取り出しの方法（効果的な）
- ・担当者以外の教員研修について

○形態について

- | | | | |
|---|---------------------|-----|-------|
| 1 | 講義形式 | 12人 | (63%) |
| 2 | 設定したテーマに関する話し合い | 6人 | (31%) |
| 3 | 事例を聞く | 15人 | (79%) |
| 4 | 授業体験・指導案作成・模擬授業等の活動 | 10人 | (53%) |
| 5 | 研究授業 | 5人 | (26%) |
| 6 | その他 | 0人 | (0%) |

(2) 研修企画の立場から見た、研修の成果と課題（企画者アンケートⅢの回答より）

日本語を母語としない児童生徒が各教科の授業に参加できる力を育むために、指導者が教科学習時に感じている児童生徒の困難感を理解し、教科内容の習得につながる日本語指導の視点に基づいた授業(各教科)の組み立てができる力量を育成することをねらいとした研修を実施した。対象者の幅が広く、レディネスの異なる受講者への対応に困難さを感じた。

	内容	5	4	3	2	1
1	つまずきの予想（現状把握）	63%	37%	0%	0%	0%
2	日本語指導のコース設計（プログラム）	31%	58%	11%	0%	0%
3	指導計画	37%	53%	11%	0%	0%
4	JSLカリキュラムの考え方・形態	53%	42%	5%	0%	0%
5	JSLカリキュラムの授業づくりの要点・目標・展開	53%	42%	5%	0%	0%
6	JSLカリキュラムにおける「ことば」の扱い（AUの考え方）	26%	47%	26%	0%	0%

7	5つの支援（理解・表現・記憶・情意・自立支援）	47%	53%	0%	0%	0%			
5	非常に	4	参考になった	3	まあまあ	2	あまり	1	参考にならなかった

アンケート結果を見ると、「非常に参考になった」と「参考になった」は、ほとんどの項目が90%程度になっている。成果は、JSLカリキュラムの考え方を学んだことで、取り出しによる授業を構想する視点が受講者に身についたことである。また、対象児童生徒の文化背景や日本語の習得状況からつまずきを想定し、適切な支援につなげることで効果的な教育活動になり、児童生徒の理解を促進することも確認できた。さらに、このことは日本語指導が必要な児童生徒だけでなく、特別な支援を要する児童生徒や学力に課題のある児童生徒の学習支援等、すべての児童生徒に有効であることに気づけた受講者もあり、今後、学校全体で取り組むべき視点として広がる可能性も考えられる。

演習において班での活動を取り入れたことも研修の充実につながった。例えば、つまずきや学習活動を班で話し合うなかで様々な見方や考え方が出され、多面的多角的に考えられたからである。

また、取り出し指導を実施するにあたり、指導時間が限られていることから、指導内容を精選して取り出し指導することの有効性を実感したことにより、カリキュラムを考える手がかりを見いだせたのではないかと思う

概ね、企画者が意図したことが受講者に伝わり、受講者の満足度も高かったように思われる。しかしながら、「日本語指導のコース設計」や「指導計画」、「JSLカリキュラムにおけることばの扱い」、「5つの支援」については受講者の実践につながるまでは至っていないように感じている。今後もJSLカリキュラムをテーマとし、授業場面を想定した研修会を継続的に開催する必要がある。

研修企画者として、県内における日本語指導が必要な児童生徒の課題と受講者のニーズを把握し、系統的かつ継続的に実施していくことが必要であると痛感した。

4. モデルプログラムについて

(1) 養成・研修内容構成（報告書 pp. 72-76）について（意見）

- ・指導者や支援者がどのような研修内容を学ぶ必要があるのかがよく分かり、企画する者として大変勉強になった。
- ・項目例だけでは、研修内容(ねらい等)がイメージできにくいものがある。

(2) モデルプログラム（報告書 pp. 207-244）について（意見）

- ・授業の指導方法等、具体的な教育場面を想定した、実践者のニーズに合わせた内容が必要であると感じた。
- ・カリキュラム作成時に参考にしようとしたが、モデルプログラム例以外の内容であったため、実際には講師の先生と相談しながら、企画者がニーズに合うプログラムを作成した。
- ・モデルプログラムの⑱か㉑で、DLAで把握したことを指導案や指導方法にどのように活かすかという視点が必要であると思われる。

(3) モデルプログラムの活用で研修の運営が円滑になったか。

- ・学校や指導者の課題と研修内容を体系的に考える参考になった。

(4) モデルプログラムの活用を通して、研修・養成で、どのような力を高めてほしいか。あるいは、高めるためには、どのような活用の仕方が必要だと思うか。

- ・理論や背景等の知識を持って、実践的な指導力を高めてほしい。
- ・理論（講義）と実践（演習）をバランス良く活用することが必要ではないか。